

ここでは、古い家に住む単身高齢者が地震に巻き込まれた場面を想定し、様子を見ていきます。

モデルデータ

住居:築30年の一戸建て
家族構成:本人82歳(単身女性)



おばあちゃんの見た光景

8月14日(土)夜11時24分

家で寝ていると、ものすごい音と背中への強い衝撃で目が覚めた。たんすが倒れ、壁が崩れ、天井がメキメキと落ちてきて、訳も分からずそのまま布団をかぶった。頭の上で、ものすごい音が鳴り響いている。地震？

11時25分 揺れがおさまったようだが、布団から顔を出すと、目の前は真っ暗。四方に手を伸ばすと何かに完全に囲まれて、起き上がることもできない。どうやら倒れた家具と落ちてきた天井のすき間にいるようだ。その瞬間、パニックになって、助けを呼ぶために叫び続けた。

11時30分 閉じ込められて何分経ったのか。「助けてっ」。叫んでは耳を澄ますが返事はない。ほこりでのども痛い。

息子は東京にいる。近所の人とは、夫が亡くなった後、話すのめ向かいの家の人だった。助けてくれたのは、ごみ出しのときにあいさつをしていた斜め向かいの家の人だった。

翌朝6時40分 疲れて眠っていたのか。もうろうとする中、「おばあちゃん」と声がする。「助けてっ」と何度も叫んだ。こちらの声は聞こえないようだだが、掘り起こすような音…。

阪神・淡路大震災体験者の声

隣人の優しさに感謝

札幌在住ですが、震災のときは神戸の実家にいました。テレビが吹っ飛び、部屋はガラスだらけで、近くでは建物が倒壊し火事が発生…。ひどい状況でした。でも、被災地の外では世の中が普通に回っていて、仕事の電話が掛かってきて戸惑いましたね。やむなく、高齢の母を家に残し、4日後には札幌に戻ることに。そのとき、近所の人が「お母さんの世話は任せて」と言ってくれたのは、本当にありがたかったですね。

阪神・淡路大震災を体験した
えびす たかひさ
我 隆久さん



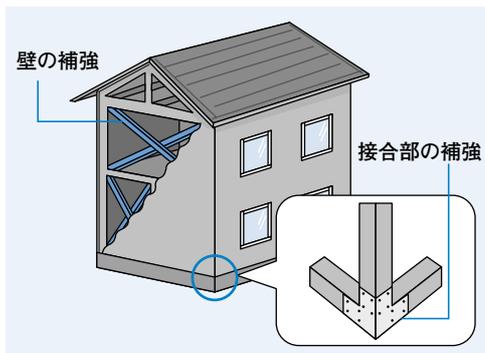
生き残るための地震対策

モデルケースに見る

阪神・淡路大震災で亡くなった方の死因は、倒壊した建物や家具の下敷きになって息ができなくなる窒息死や、そのまま押しつぶされる圧死が大部分を占めました。建物の倒壊は、命の危険につながるといえます。

地震に耐えうる建物を

阪神・淡路大震災では、耐震基準が変わった昭和56年(1981年)以前に建てられた建物の倒壊が多く見られました。耐震化は費用も掛かり、手軽ではありませんが、リフォームの機会などに一緒に検討してみませんか。



チェック

死亡の原因の約8割は建物

阪神・淡路大震災で死亡した方の約8割は、倒壊した建物が原因で亡くなっています。市では昭和56年以前に建てられた木造住宅の耐震診断や耐震改修の費用を補助していますので、詳しくはお問い合わせください。

●耐震化費用補助額(一戸当たり)

- <診断> 費用の2/3以内かつ3万円を限度
- <設計> 費用の2/3以内かつ10万円を限度
- <改修> 費用の23%以内かつ40万円を限度

【詳細】 建築安全推進課 ☎211-2867

耐震化による税金の減額・控除もあります

- <固定資産税> 詳細は区役所(1階)の課税課へ
- <所得税> 詳細は最寄りの税務署へ

